

身体的拘束等適正化のための指針

特別養護老人ホームみどりの里

1. みどりの里における身体拘束等の適正化に関する基本的考え方

身体拘束は、入居者の生活の自由を制限するものであり入居者の尊厳ある生活を阻むものです。みどりの里では、入居者の尊厳と主体性を尊重し、拘束を安易に実施、正当化することなく、職員一人ひとりが身体的・精神的弊害を理解し、拘束廃止に向けた意識をもち、身体拘束ゼロの実現に努めます。

介護保険指定基準の身体拘束禁止規定

「サービスの提供にあたっては、当該入居者又は他の入居者等の生命又は身体を保護するため緊急やむを得ない場合を除き、身体的拘束その他入居者の行動を制限する行為を行ってはならない」

緊急やむを得ない場合の例外三原則

入居者個々の心身の状況を勘案し、疾病・障害を理解した上で身体拘束を行わないケアの提供することが原則です。例外的に以下の3つの要素の全ての状態にある場合は、必要最低限の身体拘束を行うことがあります。

- ① 切迫性：入居者本人又は他の入居者の生命又は身体が危険にさらされる緊急性が著しく高いこと
 - ② 非代替性：身体拘束その他の行動制限を行う以外に代替法がないこと
 - ③ 一時性：身体拘束その他の行動制限が一時的なものであること
- ※身体拘束を行う場合には、上記三つの要件をすべて満たすことが必要。

介護保険指定基準において身体拘束禁止の対象となる具体的な行為

- (1) 徘徊しないように、車椅子やいす、ベッドに体幹や四肢をひも等で縛る
- (2) 転落しないように、ベッドに体幹や四肢をひもで縛る
- (3) 自分で降りられないように、ベッドを柵（サイドレール）で囲む
- (4) 点滴・経管栄養等のチューブを抜かないように、四肢をひも等で縛る
- (5) 点滴・経管栄養等のチューブを抜かないように、または皮膚をかきむしらないように手指の機能を制限するミトン型の手袋等をつける
- (6) 車椅子やいすからずり落ちたり、立ち上がったたりしないように、Y字型拘

束帯や腰ベルト、車椅子テーブルをつける

- (7) 立ち上がる能力のある人の立ち上がりを防げるよういすを使用する
- (8) 脱衣やおむつ外しを制限するために、介護衣（つなぎ服）を着せる
- (9) 他人への迷惑行為を防ぐため、ベッドなどに体幹や四肢をひも等で縛る
- (10) 行動を落ち着かせるために、向精神薬を過剰に服用させる
- (11) 自分の意志で開けることのできない居室等に隔離する

2. 身体的拘束等適正化検討委員会その他施設内の組織に関する事項

- (1) 身体的拘束等適正化検討委員会（指定基準省令 183 条の規定に基づく身体拘束適正化のための対策を検討する委員会、当施設では「身体拘束虐待防止委員会」という名称）を設置し、3 か月に 1 回以上開催します。
- (2) 身体的拘束等適正化検討委員会は、以下の委員で構成します。必要に応じて、主治医や看護職員、栄養士など専門職の助言を仰ぎます。
 - ・施設長 ・施設ケアマネージャー（虐待防止推進責任者）
 - ・生活相談員 ・各部署の委員 ・その他施設長が必要と認める者
- (3) 身体的拘束等適正化検討委員会は、以下の議題を検討・決定します。
 - ・前回の振り返り
 - ・身体拘束を行っている対象者の有無の確認
 - ・3 要件（切迫性、非代替性、一時性）の再確認
 - ・施設内での身体拘束廃止に向けての現状把握及び改善についての検討
 - ・身体拘束を実施せざるを得ない場合の検討及び手続
 - ・身体拘束を実施した場合、解除へ向けての再検討
 - ・身体拘束に関する職員全体への意識啓発等、必要な事項の確認と見直し
 - ・今回のまとめと今後の予定（研修・次回委員会）
- (4) 記録及び周知
 - 委員会の議事録やレジュメを委員長、または委員長が指名する者が取りまとめ、各部署に配布。介護職員その他の法人従業者に周知徹底します。
- (5) 書式について
 - 議事録の書式については、書式は問いません。ただし、開催日時、場所、参加者（役職）、上の(3)の議題とその内容を必ず含むこと。

3. 身体的拘束等の適正化のための職員研修に関する基本方針

処遇に携わる全ての職員に対して、身体拘束廃止と人権を尊重したケアの励行を図り、職員教育を行います。

- (1) 定期的な教育・研修（年2回）の実施
- (2) その他必要な教育・研修の実施（行政が実施する研修会等への参加など）

4. 身体的拘束発生時の報告・対応に関する基本方針

やむを得ず身体拘束を行う場合（緊急時の対応、注意事項）

本人又は他の入居者の生命又は身体を保護するための措置として、緊急やむを得ず身体拘束を行わなければならない場合、以下の手順に従って実施します。

(1) 委員会およびカンファレンスの実施

緊急性や切迫性により身体拘束がやむを得ない状況になったと判断された場合、フロアチーフ（管理者）は施設ケアマネージャーおよび身体拘束虐待防止委員長に報告し、委員長は臨時で身体的拘束等適正化検討委員会を招集。その場で①切迫性②非代替性③一時性の三要件の全てを満たしているかどうかについて評価、確認します。併せて主治医とも情報を共有し、受診や入院等の指示があればその指示に従います。

また、フロアチーフ（管理者）は生活相談員を通じて、当該入居者の家族等と連絡をとり、身体的拘束実施以外の手立てを講じることが出来るかどうか協議します。

上記三要件を満たし、かつ医療機関や家族等による対策が困難な場合は、拘束による入居者の心身の弊害や拘束を実施しない場合のリスクについて検討し、その上で身体拘束を行う判断を、「拘束の方法」「場所」「時間帯」「期間」等について検討し確認します。また、早期の段階で拘束解除に向けた取り組みの検討会を随時行います。

(2) 入居者本人や家族等に対する説明

施設の窓口は生活相談員が担当。身体拘束について家族様に説明し、同意を求める場合は、フロアチーフ（管理者）およびケアマネージャーと日程を調整し、カンファレンス日を決定。その場において身体拘束の内容、理由、拘束時間又は時間帯、期間、場所、改善に向けた取り組み方法を詳細に説明し、十分な理解が得られるように努めます。

また、当初の身体拘束の予定期限を超え、なお身体拘束を必要とする場合については、事前に家族と締結した内容と方向性、入居者の状態などを説明し、同意を得た上で実施します。

(3) 記録・検討

みどりの里の身体拘束・虐待防止マニュアルに定められた専用の様式を用いて、その態様及び時間、心身の状況・やむを得なかった理由などを記録し共有するとともに、身体拘束の早期解除に向けて、拘束の必要性や

方法を逐次検討します。

また、実施した身体拘束の事例や分析結果について処遇職員に周知し、身体拘束検討・実施等に係る記録は2年間保存します。

(4) 拘束の解除

(3) の記録と再検討の結果、身体的拘束の三要件に該当しなくなった場合は、委員会などの決定を待たずにフロアチーフ（管理者）の判断で直ちに身体拘束を解除し、生活相談員を通じて入居者・家族等に報告します。その後、当該フロアの委員は定例の身体的拘束等適正化検討委員会の中で、身体拘束解除を報告します。

5. 身体的拘束等適正化に向けた各職種の責務及び役割

身体拘束廃止に向け、各職種の専門性に基づくアプローチから、チームケアを行うことを基本とし、それぞれの果たすべき役割に責任をもって対応します。

6. その他の身体的拘束等の適正化推進のための必要な基本方針

身体拘束をしないサービスを提供していくためには、施設サービス提供に係る職員全体で以下の点に十分議論して共通認識をもつ必要があります。

- 認知症高齢者であるということや、高齢者は転倒しやすく転倒すれば大けがをするという先入観で安易に身体的拘束を実施していないか
- サービス提供の中で、本当に緊急やむを得ない場合のみ身体拘束等を必要と判断しているか（別の対策や手段はないのか）
- マンパワー不足や業務の効率化など、職員側の一方的な都合を理由に、安易に身体拘束をしていないか

7. 指針の閲覧について

当施設の身体的拘束等適正化のための指針は、求めに応じていつでも入居者及び家族等が自由に閲覧できるように、当施設1F事務所カウンターにある閲覧ファイル内に保管すると共に、ホームページ上にてデータを公表します。

附則 本指針は平成30年4月1日より施行します。